

速報展

# 発掘された鈴鹿 2005

2006. 3. 21 ~ 2006. 7. 9

無料 Take Free



平田遺跡 南山遺跡 萱町遺跡  
白鳥塚1号墳 伊勢国府跡 奥山田古墳  
長法寺遺跡 白子深田遺跡 境谷遺跡  
中尾山遺跡 伊勢国分寺跡

特別展示  
保存処理された木製品  
神戸中学校遺跡・天王遺跡・三宅神社遺跡

## 伊勢国分寺跡第31次発掘調査 航空写真

「院」の発見!

塔は……?

今回の大きな成果は、築地によって区画された院が確認されたことです。東西45m×南北30mの規模です。この院には、南側に簡易な造りの門がありました。院内では建物などの痕跡を確認することができなかつたため、何の目的で造られたのかは不明ですが、この院の性格については、次のような可能性を考えています。

### 1. 布施院

都などで労役に服するために往來する人々に食事や宿などを提供する「布施」を行う施設

### 2. 国師院

国分寺の僧尼の監督や経論の講義などを行った国師（講師）と呼ばれる僧侶のための施設

### 3. 施設の増築

何らかの理由で必要になった施設の増築

残念ながら伊勢国分寺跡は遺跡の残存状況が非常に悪いため、これ以上の可能性を探ることは困難であると考えられます。このためこの院の性格については、今後全国の国分寺で行われる調査で類似例が発見されるのを待ちたいと思います。

また、今回の調査の大きな目的であった塔跡の確認については、何ら手がかりを得ることができませんでした。今後の調査に期待したいと思います。



鈴鹿市考古博物館  
Suzuka Municipal Museum of Archaeology

〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町224

TEL 059-374-1994 FAX 059-374-0986

E-mail: kokohakubutsukan@city.suzuka.mie.jp

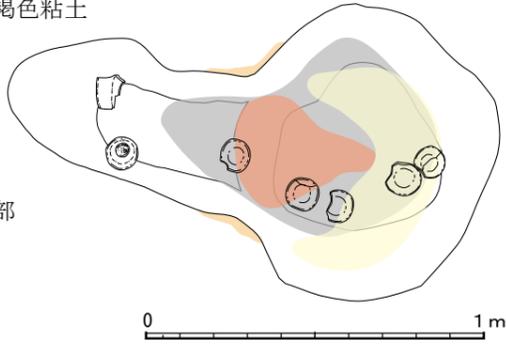
URL: <http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/>

## 平田遺跡 第4次調査

1月7日～1月20日  
個人住宅建設による緊急調査  
平田本町一丁目

平田遺跡は、鈴鹿川右岸の標高約22mの段丘上に位置する弥生時代から戦国時代にかけての遺跡です。

今回の調査では、**竪穴住居・掘**



土器焼成坑平面図

- にぶい黄褐色粘土
- 焼土塊
- 炭化物
- 被熱硬化部



土器焼成坑

立柱建物・土器焼成坑・土坑・柱穴などが見つかりました。

中でも注目すべきは、平安時代末から鎌倉時代初頭に造られたと思われる土師器を焼いた窯の跡（土器焼成坑）です。径約80cmの

浅い円形の穴（円形部）の西側に、幅約40cmの溝（溝部）が70cmにわたって取り付く遺構です。円形部と溝部が接続する部分の壁は強い熱を受け赤くなり、硬化しています。

円形部の底には1～2cmの炭の層があり、その上からは赤く焼けた粘土の塊がたくさん出てきました。

ここから出土した土師器は形を作る時にロクロを使用したもので、ロクロ土師器と呼ばれるものです。見つかったロクロ土師器はすべて小皿で、円形部から4点、溝部から2点出土しました。

奈良時代の土器焼成坑は三重県内でも多数見つかっています

今回見つかったものと同時期のものは県内では四日市市で2例ほどが知られるのみです。しかしながら、この2例は遺構の残りが悪く全体の様子は分からないため、今調査の比較的残りの良い土器焼成坑の発見は、不明な点が多いこの時期の土師器生産を考える上で重要なものといえます。

## 平田遺跡 第5次調査

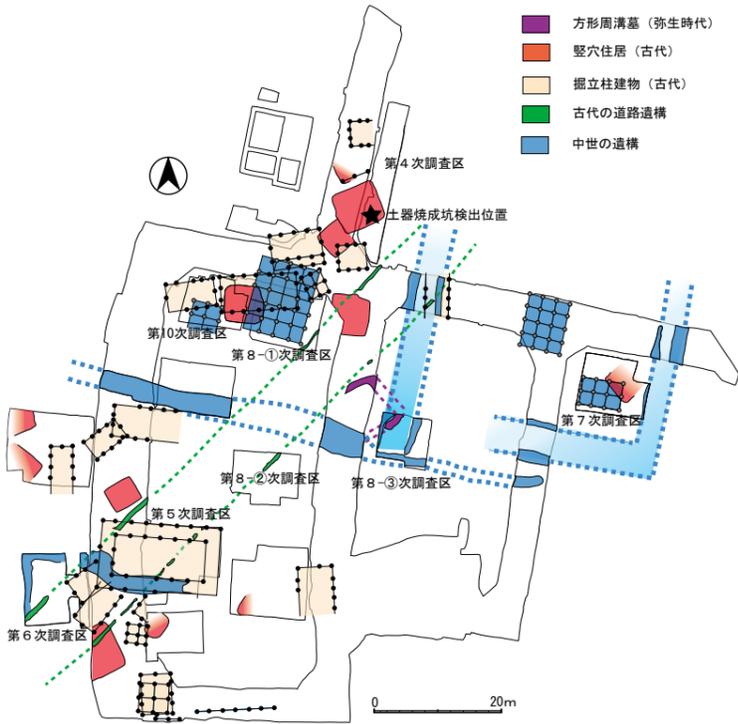
2月9日～2月24日  
個人住宅建設による緊急調査  
平田本町一丁目

第4次調査に引き続き行われた第5次調査では、掘立柱建物・溝・土坑・柱穴などが見つかりました。

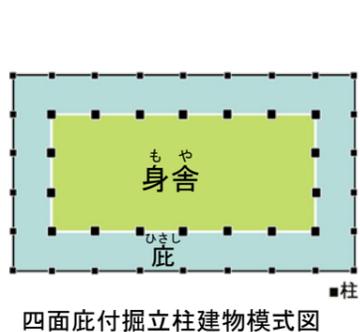
掘立柱建物は第1次調査で確認された掘立柱建物の続き（東側半分）です。四角い1辺1.0～1.3mの柱穴で構成される梁行き3間、桁

行き6間の身舎の周りに、一回り

が、今回見つかったものと同



平田遺跡遺構配置図



四面庇付掘立柱建物模式図



四面庇付掘立柱建物（柱穴に人が立っています）

小さい柱穴の底を付け、建物の床面積を大きくしています。東面庇の存在が不確定ですが、四面庇とすれば、全体の規模は東西18.6m×南北10.5mとなり床面積は195㎡（約60坪）となります。

出土遺物はいずれも小片で時期が判明するものではありませんが、周辺の遺物や第1次調査区の遺物などから奈良～平安時代に建てられた建物と考えられます。

今回見つかったような四面庇付掘立柱建物は、都の宮殿や貴族の邸宅に採用された格式の高い建物の形式で、地方では国や郡の役所の中心施設、役人や豪族の館にこの形式のものが見られます。建物の規模も役所の中心施設であつてもおかしくない大きさです。このように格式の高さ・規模から見ると、この建物が一般集落のもので

ないことは明らかです。また、出土遺物の中に、文字を使用した証拠になる硯や、近隣に寺院の存在を思わせるような瓦が一定量出土することからも遺跡の特殊性がうかがえます。



四面庇付掘立柱建物の柱穴

## 平田遺跡 第6次調査

4月11日～4月28日  
個人住宅建設による緊急調査  
平田本町一丁目

第6次調査では、第1次調査で検出した掘立柱建物や溝の続きを確認しました。その結果、掘立柱建物の規模は梁行が2間であることがわかりました。

また、第1次調査でゆるやかに蛇行しながら東から西へと向かう中世の溝の続きは、当調査区の西側で西と南の二方向に分岐します。他に調査区の南西隅から北東方向に向かう溝は、第1次調査の結果と総合すると幅約9m（内法）の道路遺構の西側側溝の可能性が考えられます。

その他には、南北に細長い土坑を検出しました。この土坑からはほぼ完全な形の山茶碗・山皿が出土しました。

他には、竪穴住居を検出しましたが、削平が著しいため西側部分しか遺構が残っていません。住居内の北西部に焼土の痕跡があり、竈があつたものと考えられます。

## 平田遺跡 第7次調査

4月26日～5月8日  
個人住宅建設による緊急調査  
平田本町一丁目

第7次の調査区は、第1次調査で確認した中世の掘立柱建物とその建物の三方（東・南・西）を囲む二重の溝で囲まれた区画の南東部にあたります。今回の調査区でも東側を区画する溝の続きを確認しました。その溝の西側に中世の掘立柱建物を検出しました。第1次調査の掘立柱建物と共に区画内に建てられたと考えられます。

また、調査区の南西隅ではL字状に曲がる溝を検出しました。出土遺物から判断して、古墳時代前期の溝と考えられ古墳の周溝の可能性も残ります。

他には竪穴住居を検出しましたが、削平が著しいため西側部分しか遺構が残っていません。住居内の北西部に焼土の痕跡があり、竈があつたものと考えられます。

調査区全景



調査区全景

## 平田遺跡 第8次調査

6月17日～7月8日

個人住宅建設による緊急調査

平田本町一丁目

第8次調査は調査区が3箇所に分かれます。大きな成果としては、道路部分を調査した第1次調査で検出された遺構の続きが続々と明らかとなったことです。

### 第8・①次調査

第1次調査で検出した掘立柱建物の続きを確認しました。飛鳥時代から奈良時代にかけての掘立柱建物の規模は東西5間×南北3間、鎌倉時代の掘立柱建物の規模は東西4間×南北5間であることがわかりました。

また、調査区の西側で方形の土坑を検出しました。この土坑からは土師器・須恵器の他に鉄滓（てつさい）が出土し、埋土には焼土が含まれていました。調査区の南でも楕円形の土坑を検出し、土師器・須恵器などが出土しています。南東隅では方形の土坑を検出し、常滑焼（なめはき）の底部が出土しています。

### 第8・②次調査

主に中世の遺構を検出しました。調査区の南側で検出した土坑からは完形に近い山茶碗が出土しています。山茶碗の中には底部に墨で格子状の記号（ドーマン？）が書かれたものもあります。

### 第8・③次調査

第1次調査で検出した弥生時代後期の方形周溝墓の続きを確認することができました。北西と北隅が検出されていた方形周溝墓



掘立柱建物(道路部分は第1次調査の判明分)

## 平田遺跡 第9次調査

10月11日～12月18日

宅地造成による緊急調査

弓削一丁目

第9次調査では、古墳時代から中世にかけての遺構を確認しました。古代の遺構は主に北区で、中世の遺構は主に南区で確認されています。

古墳時代の遺構としては、L字状に曲がる幅4～5mほどの溝を検出しました。古墳(方墳)の周溝と考えられます。この溝からは遺物がほとんど出土していません。築造時期は不明です。

周溝の底部から掘立柱建物の柱穴が見つかりました。古墳が築造される以前に建物があったことがわかりました。

飛鳥時代～奈良時代の遺構には、竪穴住居が11棟・掘立柱建物も11



べっこう製横櫛



甕出土状況

棟あります。

中世の遺構としては、南区の西端で幅2mの南北溝を検出しました。出土遺物から室町時代以降埋没したものと考えられます。屋敷地を区画するための溝と考えられます。

## 平田遺跡 第10次調査

12月14日～12月27日

個人住宅建設による緊急調査

平田本町一丁目

第10次調査では、第1次・第8・①次調査で検出された飛鳥時代から奈良時代にかけての掘立柱建物の続きを確認しました。当初、この建物の規模を東西5間×南北3間と想定していましたが、今回の調査でさらに西へ延びることが判明し、東西6間の規模を持つ掘立柱建物であることがわかりました。その西側で検出された掘立柱建物の北辺と第1次調査で検出されている掘立柱建物の底がほぼ一直線上に並ぶことから、計画的に建物を配置したものと考えられます。

また、調査区の南側でも掘立柱建物、東側では竪穴住居を検出しています。



重なり合う掘立柱建物と竪穴住居

## 南山遺跡 第3次調査

5月30日～6月3日

進入道路建設による緊急調査

河田町

南山遺跡は、鈴鹿川左岸の台地の先端部に位置し、弥生時代の遺物や古墳群などが確認されています。平成7年度に今回の調査区の西に隣接する箇所を発掘調査が行われ、弥生時代後期の竪穴住居1棟と方形周溝墓1基が確認されています。そのため、平成17年4月には、福祉施設の建設に先立ち試掘調査を行いました。遺構や遺物は確認できませんでした。

今回の調査は、施設敷地内の進入路工事の際に遺構が発見されたことから、遺跡の記録保存を目的として行ったものです。

調査の結果、溝1条・竪穴住居3棟といくつかの柱穴を検出しました。

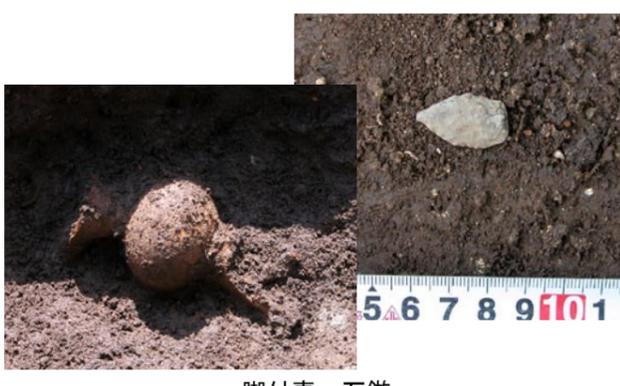
建替え前の福祉施設の玄関正面で検出した溝の規模は、幅約3.2m、



崖面に残る溝の断面

深さ約1mを測ります。溝の断面は逆台形状で、溝底部の角が型崩れせずに残っています。竪穴住居を検出した調査区の崖面にこの溝の東肩がわずかに残存していたことから、この溝は北東～南西方向に13m以上延びることが判明しました。溝埋土には、脚付壺や高環など多くの土器が含まれていました。出土した土器は弥生時代後期に位置付けられます。南山遺跡の谷をはさんで南西には環濠を持つ一反通遺跡があり、今回の調査で検出した溝も立地条件や規模、形状からおそらく環濠などの濠と考えることができます。

3棟の竪穴住居は切り合い関係があるため時期差があります。最も新しい竪穴住居の埋土からは石鏃や弥生時代後期の高環、甕などの土器片が出土していることから、竪穴住居と溝が併存していた可能性も考えられます。これらのことから、調査区周辺には弥生時代に濠を伴う集落(環濠集落)が形成されていたと推測できます。



脚付壺・石鏃

萱町遺跡

2月15日～3月15日  
宅地造成による緊急調査  
神戸八丁目

萱町遺跡は、鈴鹿川右岸の低位段丘上に位置します。

本遺跡では昭和18年に出土したという、弥生時代後期の紅彩文土器（壺）3点が知られています。

出土したのは神戸中学校に近い旧萱町の西側で、貯水池の掘削中に地下2mの地点から偶然発見されたようです。そのため、調査においても弥生時代の遺構や遺物が確認できるのではないかと想定していましたが、当初の予想に反して確認できたのは古墳時代から中世の遺構でした。

今回の調査において最も大きな成果は、調査区北辺で検出した2条の溝です。溝の位置関係や出土遺物が似通っている点、また2条の溝の間が陸橋状に残っている点などから、この2条の溝は一連の溝として掘削されたものと考えられます。



古墳周溝（中央に陸橋状の部分が見える）



馬形埴輪の脚出土状況

溝からは、多くの円筒埴輪片とともに高坏やハソウといった祭祀的色彩の濃い遺物が出土しています。さらに、大刀の先端部と考えられる鉄製品も出土しています。これらの遺物から判断すれば、2条の溝は古墳の周溝であると考えられます。溝から出土した埴輪や土器・鉄製品は、古墳の破壊によって、崩落あるいは廃棄されたものと推察できます。



円筒埴輪



円筒埴輪出土状況



萱町遺跡調査風景

このような調査成果から、調査区の南側に古墳が存在した可能性は非常に高くなっています。現存する阿賀神社古墳を含め、この辺り一帯に大小の古墳が多数存在していたと考えられます。

また、想定外であった古代や中世の遺構を確認したことも大きな成果です。古代の遺構として検出したもののほとんどは奈良時代の土坑です。しかしながら、土坑だけではこの地が居住域であったとは言いがたく、今回の調査区は集落の中心からはやや離れていたのではないかと推測されます。また円面硯（すずり）の出土は、この地に文字を使用する階層が存在した証拠となり得ます。



円面硯

白鳥塚1号墳

第2次調査

4月15日～8月12日  
学術調査  
石薬師町字北松塚

白鳥塚古墳群は鈴鹿市加佐登町字椎山から石薬師町字北松塚に位置し、1号墳を主墳とする計7基が確認されています。

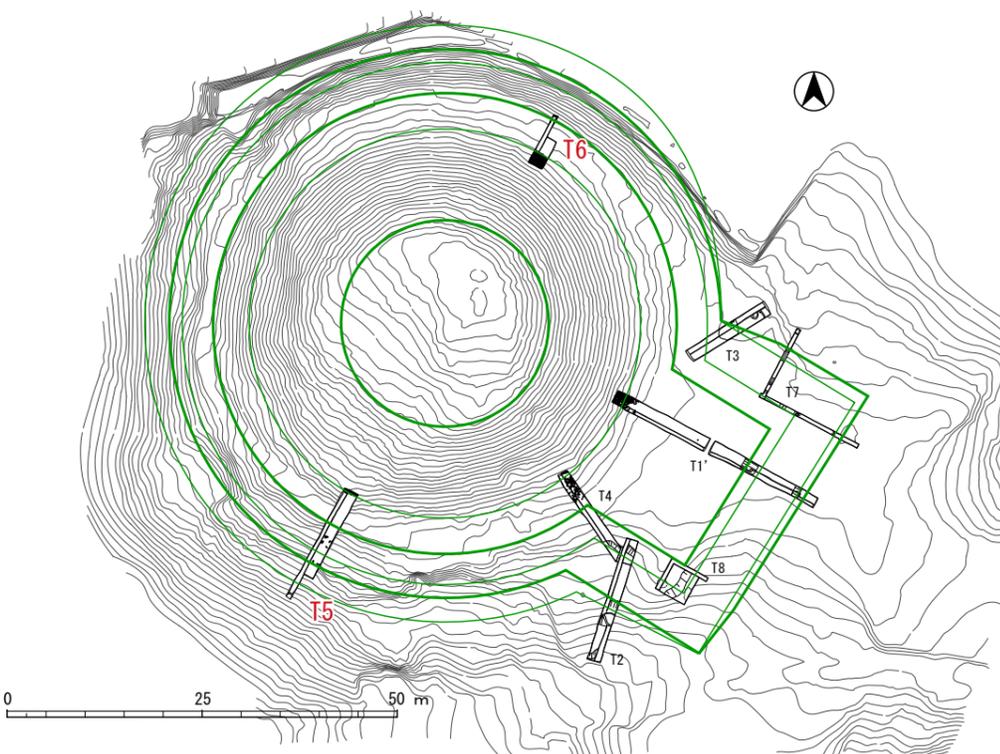
今回調査した1号墳は三重県最大の円墳で、『鈴鹿市史』によればその規模は東西径78m・南北径60m・墳丘高13mを誇り、昭和12年に三重県史跡に指定されました。平成17年度の発掘調査が行われるまでは、5世紀後半から6世紀の築造とされ、横穴式石室の可能性も指摘されていました。ただその根拠となる遺物資料は乏しく、隣接する加佐登神社には富岡鉄斎が明治21年頃滞在中に描いたとされる『能褒野陵并笠殿』と題する絵図・出土品を描いた巻物が存在しますが、これらは白鳥塚1号墳出土のものとは考えがたく、わずかに表採資料が数点伝わるにとどまっています。

平成16年度の範囲確認調査の結果、墳丘から12mの地点で幅約7mの古墳の周溝を検出しました。この調査経過を踏まえて、

1. 規模が一回り大きくなる可能性（円墳）
2. 墳形が変わる可能性（帆立貝式古墳）

の両面を想定した上で、トレンチを8本設定し、範囲確認調査を行うこととなりました。

地点で古墳周溝を検出しました。また、県指定史跡範囲内のトレンチでは円筒埴輪が出土しました。この埴輪の透かし穴は半円形を呈すると見られ、5世紀前半のものと考えられます。このことから白鳥塚1号墳は従来考えられていた5世紀後半から6世紀にかけての時期の円墳ではなく、5世紀前半に築かれた帆立貝式古墳の可能性が高くなりました。また、他のトレンチの調査結果から、墳丘は全体には2段築成、部分的には3つの段を持つことが確認されました。



白鳥塚1号墳

平成17年度の調査成果まとめ

	従来の見解	新しくわかったこと
墳形	円墳（楕円）	帆立貝式古墳
規模	東西径 78 m 南北径 60 m	墳長 80m（全長 92m） 後円部：径 64m（基壇含 77m） 高さ 9m（基壇含 11m） 前方部：長さ 15.5m 幅 27m
時期	5世紀後半～6世紀	5世紀前半
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・墳丘は2段構成であり、段築は最下部で基壇を設けその上に築かれていたことが確認されました。</li> <li>・トレンチ（T5とT6）の基底石の検出により、正確な段築最上段の規模・位置が確認できました。</li> </ul>	

## 伊勢国府跡 第20次調査

8月22日～11月30日

学術調査

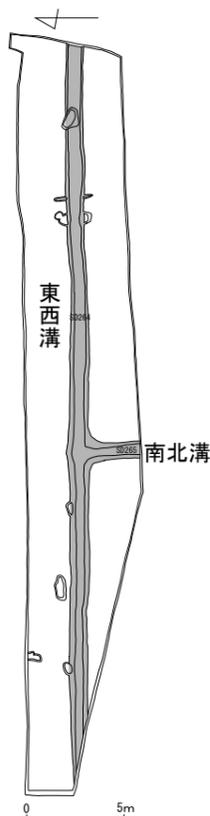
広瀬町字丸内・字西野

伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）は安楽川北岸の標高約50mの段丘上に位置し、鈴鹿市広瀬町・西富田町、亀山市能褒野町・田村町にまたがって広がる遺跡です。

鈴鹿市では、平成4年度から学術調査を続けており、平成7年度までに政庁全体の構造・規模をほぼ明らかにし、平成8年度以降には、政庁周辺の調査を進め、政庁西隣で「西院」とも呼ぶる区画を発見しています。また、北方では区画内部に瓦葺礎石建物が整然と建ち並んだ方格地割（北方官衙）の存在も確認しています。

この方格地割ですが、三重県埋蔵文化財センターによる平成6・7年度の調査から、復元案が示されています。この方格地割案は、一辺約120mの略正方形を1区画とし、東西5区画、南北6区画の規模で推定されていますが、その後に行われた調査の結果から、方格地割の展開範囲を当初復元案よりも狭く考える見解も提示されるなど、現在検討中です。

こうした状況を踏まえて、当館では平成15年度より方格地割の範



6AAD-B区平面図

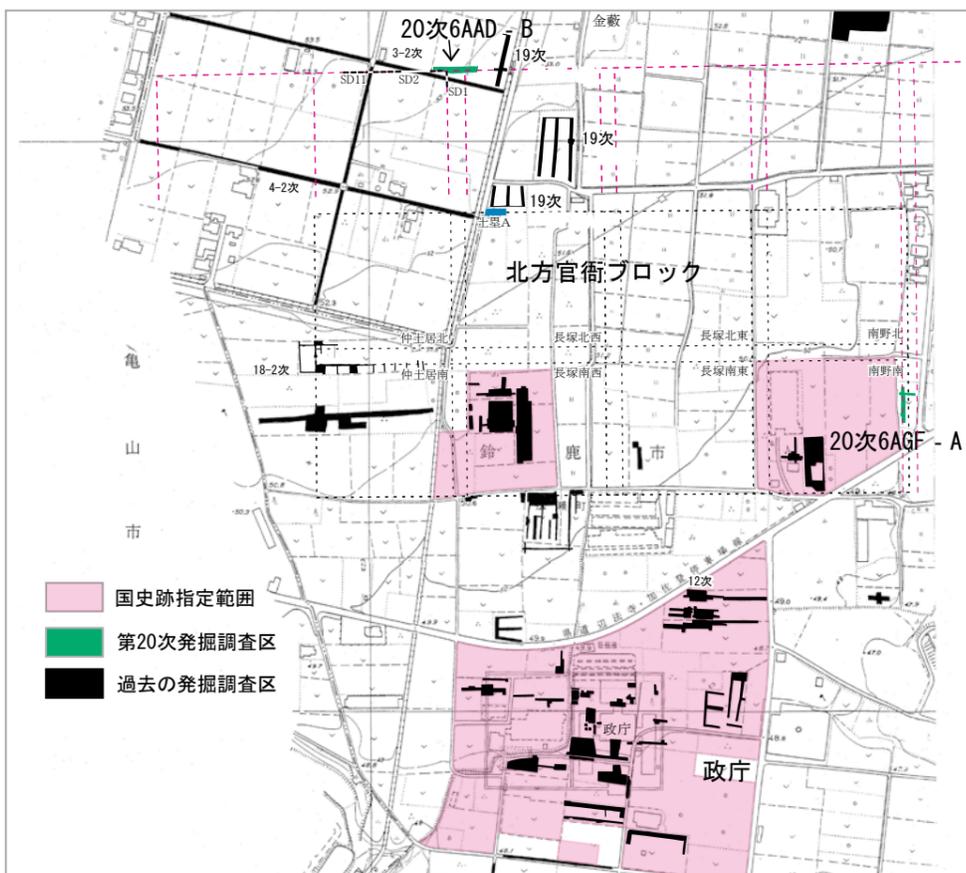


方格地割北限の溝 (6AAD-B区)

囲確定に重点を置いて調査を進めており、平成15年度調査では西限、平成16年度調査では北限の確認を目的としました。これに引き続いて、平成17年度は北限・東限の確認を重点目標としました。

このため、北限を確認する調査区としては、当初復元案の最も北側に推定されていた区画列のうち、西から3番目の区画の北辺部分に6AAD-B区を設定しました。さらに東限を確認する調査区として、復元案の最も東側に想定されていた区画列の北から3番目の区画の東辺部分に6AGF-A区を設定しました。

その結果、6AAD-B区で溝2条、6AGF-A区で溝1条を検出しました。6AAD-B区の東西溝とその溝に直交する南北溝



伊勢国府跡発掘調査区配置図

は、過去の調査で検出している方格地割の溝と規模・断面・埋土が類似することから同一の溝と考えて間違いなようです。また東西溝と交わっている南北溝が北側に延びないことから判断して、この東西溝が伊勢国府の方格地割の北限を示す遺構である可能性が考えられます。

6AGF-A区でも、想定どおり（方格地割案の東端）の位置に南北溝を検出しました。またひとつ、一連の設計に基づいて規格性のある配置がなされた遺構が加わったこととなります。

遺物としては、6AAD-B区から瓦片（丸瓦・平瓦）が2片出土しただけです。



6AAD-B区調査風景



6AGF-A区溝 (北から)

## 奥山田古墳

8月8日～8月10日

倉庫建設による緊急調査

御園町字琴谷

奥山田古墳は鈴鹿南西部丘陵の東部に位置し、御園町方面から入る中ノ川支流の谷を北に望む尾根上にあります。その規模は、『鈴鹿市史』によると径8m・高さ1mと記載されています。

古墳の現況は西側と南側が削平されて崖状を成しています。この地形の改変は崖面に生えた樹木の年輪から約30年ほど前に行なわれたと推定されます。北から東にかけてはほぼ旧状を留めていて、東西8m×南北6.5mの扇形をした高まりとして認められます。高さは南の平坦面からは2.5mを測りますが、本来は市史にあるとおり1mほどの高まりであったとみられます。



奥山田古墳 (調査前)

調査は主体部などの存在を確認するために、高まりのほぼ中央を基準点として南北5m・東西7.5



奥山田古墳調査風景

これらの結果からこれまで奥山田古墳と呼ばれていたものが、実は尾根の浸食によって生じた自然地形の高まりであったと判断せざるを得ませんでした。その形状から塚（古墳）として認識されてきたと考えられます。

地表面の観察でも落ち込みなどは存在せず、遺物も墳丘中央やや北の攪乱穴から近代の磁器茶碗片が出土したのみです。

この結果、表土である腐葉・細根を含む細砂質シルト層をわずか数cm～10数cmを除去すると、純粋な細砂質シルト層が現れ、基盤層（地山）と認められました。



十字のトレンチ

**長法寺遺跡 第2次調査**  
 4月25日～7月6日  
 老人福祉施設増築による緊急調査  
 長法寺町字権現

長法寺遺跡は中ノ川に向かって張り出した幅70m程の舌状の丘陵上の平坦地にあります。

平成9年度に老人福祉施設建設に伴い実施された第1次調査では、弥生時代中期の方形周溝墓5基・中世の掘立柱建物・焼土坑などを検出しています。方形周溝墓の周溝からは弥生土器・石器（石



方形周溝墓（四隅に人が立っています）

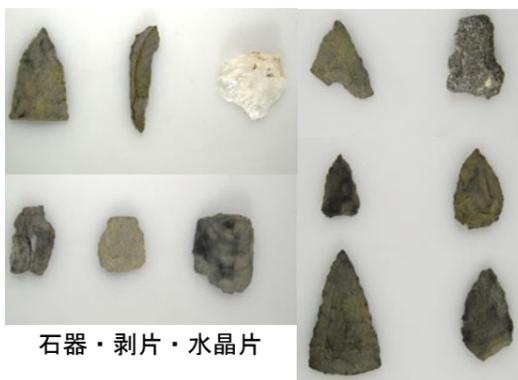
鎌・石小刀）が出土しました。第2次調査の結果、第1次調査で検出した方形周溝墓の周溝の続きを検出し、新たに方形周溝墓2基を検出しました。これで、調査地では7基の方形周溝墓を確認したことになります。周溝からは石鏃や水晶の剥片、磨製石斧、弥生土器などが出土しました。土器の中には、完形の細頸壺や倒立した状態で置かれたと考えられる甕などがあり、墓に供献されたものと考えられます。細頸壺は頸部から体部にかけてへらによって文様が刻まれています。また、倒立した



弥生土器細頸壺（周溝から出土）



弥生土器甕（周溝から出土）

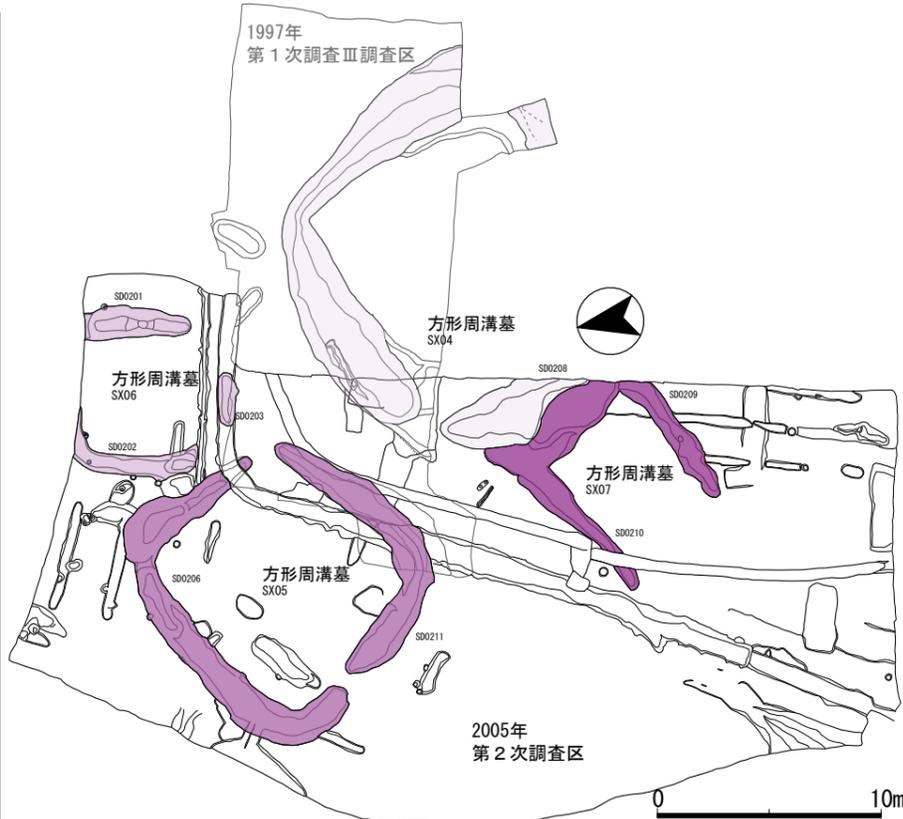


石器・剥片・水晶片

状態で出土した甕の底部には穴があけられています。2次にわたる調査で方形周溝墓7基を検出し墓域は確認できましたが、長法寺遺跡の集落における居住域は未確認です。この地に墓を営んだ人々の集落については台地の周辺に存在したと考えられます。

**白子深田遺跡**  
 10月3日～10月13日  
 土地区画整理事業による試掘調査  
 白子町深田

遺構・遺物の包蔵状態の確認を目的として、4m×4mのトレンチ（試掘坑）を28箇所設定し実施しました。調査の結果、一部のトレンチで土坑・溝を確認しましたが、遺物がほとんど出土しないため時期不明の溝が多いです。土師器片が出土した溝もありました。が、下位の層から近世以降の遺物が出土したり、他にも近世陶器が出土している溝もあることから考えて、ほとんどが近世以降の溝と考えられます。遺物は、土師器や



長法寺遺跡遺構配置図

土師・山茶碗・近世陶器等の小片が出土しました。『三重の戦争遺跡』によると、調査区西側一帯には戦時中に第一鈴鹿海軍航空基地があり、滑走路も2箇所ありました。地権者に話を伺うと、当該調査区には土製掩体壕（軍用機を空襲から守るために造られた格納庫）が2基あって、戦後にこれらを取り壊し整地して田畑にしたということです。この整地を裏付けるものとして、一部のトレンチの検出面からビニール製品が確認されたことや整地層から検出面まで中世から近代の遺物が混じって包含していることなどがあげられます。これらの結果から、大半のト



溝（左）・土坑（右）



長法寺遺跡調査風景

レンチは検出面まで攪乱されていると判断しました。また、遺物を包含していない溝は近代・現代の何らかの区画溝と考えられます。

境谷遺跡・中尾山遺跡

10月3日～3月10日

公共施設建設による試掘調査

国分町字境谷・字中尾山

境谷遺跡ならびに中尾山遺跡の範囲確認調査は、鈴鹿市不燃物リサイクルセンター2期事業に伴い行った調査です。幅2mのトレンチを合計34箇所、調査地に設定しましたが、平成17年度は試掘調査であるため、遺構の掘削は行っていません。

調査の結果、遺構密度に違いはありますが、ほとんどのトレンチで遺構を確認しました。主な遺構としては、竪穴住居・溝・土坑・柱穴などです。調査地の谷部分は堆積した耕作土層から、水田耕作などの生産域として利用されていたようです。また、調査地南東にあたる尾根上に、竪穴住居が集中して確認されたため、境谷遺跡の集落の中心部であったと推測できます。



調査区



須恵器ハソウ

中尾山遺跡では、平成元年にリサイクルセンター1期事業に伴い発掘調査が行われ、舌状にのびる台地上からは弥生時代中期の竪穴住居や方形周溝墓などが確認されました。今回トレンチを設定した場所は、その北西にあたり、過去の調査同様に集落が広がると想定していましたが、遺構は柱穴数基のみで、集落とは言いがたい状況でした。周辺に遺構が残存する可能性は低いと考えられます。

伊勢国分寺跡 第31次調査

7月28日～1月20日

学術調査

国分町字堂跡

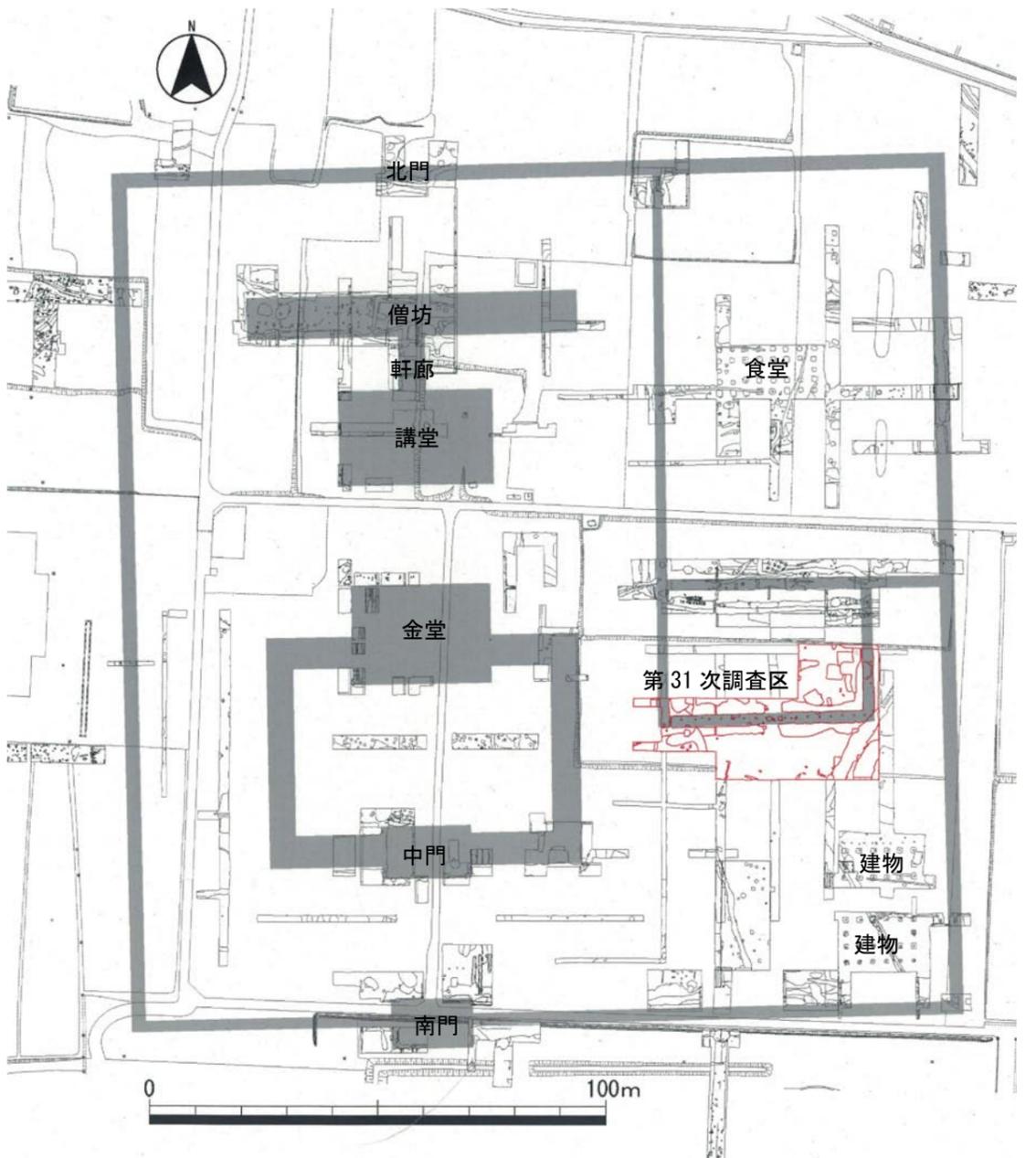
平成16年度までの調査で塔が確認できていない状況の中、史跡公園整備に向けての計画調査の最後の年を迎えました。

これまでの調査で、塔を建てることのできたであろうと思われる空閑地がかなり限定されてきました。このため、平成17年度の調査では、伽藍地の東中央部に調査区を設定し、広い範囲を面的に調査することにしました。

調査の結果、3基の築地とそれに伴う溝・門1基・柱列2条・竪穴住居3棟などが検出されました。遺跡保存のためなるべく遺構検出までにとどめましたので、遺物の数は少ないですが、鬼瓦や



「院」(東から)



伊勢国分寺跡第31次調査配置図

「勾」・「十」と刻印された平瓦等が出土しています。一面にありますように、貴重な成果として院の発見はありましたが、今調査の大きな目的であった塔跡の確認については、何ら手がかりを得ることができませんでした。このため、現段階ではこれまでの調査の結果を踏まえて伊勢国分寺の伽藍地内には塔がなかったのではないかと結論に至りました。国分寺には塔があり、国分尼寺には塔がないことが文献や全国各地の発掘調査の結果などから通説となっています。しかし、伊

勢国分寺が尼寺であるという明確な証拠もこれまでの調査で見えていないので、今後着手予定の整備事業の中で追加調査を行って塔についての検証をしていきたいと考えています。



軒丸瓦の出土



刻印瓦「勾」・「十」

# 特別展示

# 保存処理された木製品

発掘調査で出土した木製品は、水に漬かったままの状態では長い間土の中に埋もれていました。出土後、それをそのまま自然に乾燥させておくと、ひび割れが生じたり、収縮したりして木製品そのものが変形してしまうので、早急に保存処理を施す必要があります。この処理には時間がかかるた

め、同時期に出土したものとつしよに速報展で展示することができませんでした。今回特別に、過去の調査で出土し、保存処理された木製品を展示します。

## 神戸中学校遺跡第2次調査

平成10年8月17日～8月31日  
宅地造成による緊急調査  
十宮四丁目

神戸中学校遺跡は鈴鹿川右岸に形成された低位段丘上に位置し、弥生時代後期から江戸時代に至る複合遺跡として知られています。調査の結果、井戸を3基検出しました。いずれの井戸にも井戸枠は残っていませんでした。漆器椀・羽釜・近世陶器などが出土し、これらから室町時代の井戸が2基、江戸時代の井戸が1基と考えられます。



漆器椀（江戸時代）

## 天王遺跡第11次調査

平成15年8月21日～10月10日  
病院建設による緊急調査  
岸岡町字天王

天王遺跡は鈴鹿川右岸の沖積平野の最南端にあります。平成8年度以降、開発に伴う緊急調査が断続的に実施され、現在までに13次にわたって調査が行われています。

第11次調査の結果、病院建物の基礎の下から、深さ2.3mの素掘りの井戸が見つかりました。山茶碗などの出土遺物から判断して鎌倉時代の井戸と考えられます。曲物・底板・へら状木製品が出土し、最下層からは枡（18.5×19.5×9.3cm）がほぼ完形で出土しました。枡の材質は檜で、竹釘を用いて組み合わせています。底面の四辺中央と側面の四角中央にV字型の切り込みがあります。



枡・へら状木製品（鎌倉時代）

## 三宅神社遺跡第5次調査

平成11年9月9日～12年1月5日  
ほ場整備による緊急調査  
国府町字中木曾田

国府町にある三宅神社は式内社に比定されており、伊勢国総社の有力候補地として知られています。その三宅神社を中心に東西200m・南北400mの範囲が三宅神社遺跡です。ほ場整備に伴う第5次調査は神社の南約200mの場所に調査区を設けました。調査の結果、7基検出した井戸のうち、鎌倉時代の井戸2基（井戸1・井戸2）、奈良時代の井戸1基（井戸3）から展示の木製品が出土しました。深さ4mの井戸1の底からは、片口鉢・漆器椀・曲物が出土しました。また、7基の井戸のうち最大の規模をもつ井戸2からは、糸巻が出土しました。深さ2.4mの井戸3は、四隅に角材を立て柱としてあります。興味深いことに、四隅それぞれ柱周辺から、祭祀具である齋串が4本出土しています。これは、井戸を掘削するとき、清浄な水が絶えることなく湧き出るように祈った祭祀で使用されたものだと考えられます。また、底から横櫛も出土しています。



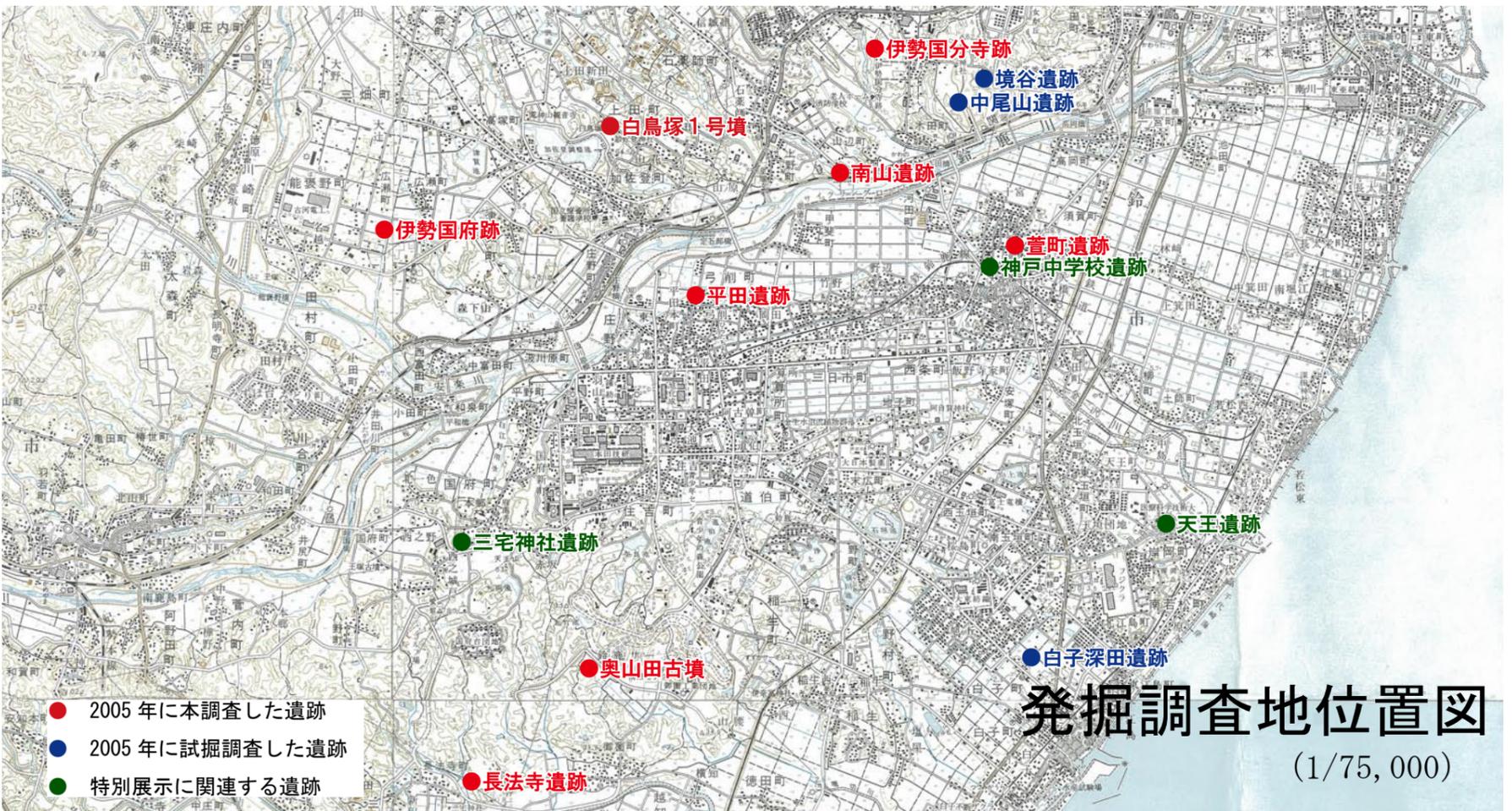
井戸2出土糸巻・井戸1出土曲物（鎌倉時代）



井戸1出土 片口鉢・漆器椀（鎌倉時代）



井戸3出土 齋串・横櫛（奈良時代）



## 発掘調査地位置図

(1/75,000)

- 2005年に本調査した遺跡
- 2005年に試掘調査した遺跡
- 特別展示に関連する遺跡

● 長法寺遺跡

● 白子深田遺跡

● 天王遺跡

● 萱町遺跡

● 神戸中学校遺跡

● 南山遺跡

● 平田遺跡

● 伊勢国府跡

● 奥山田古墳

● 白鳥塚1号墳

● 境谷遺跡

● 中尾山遺跡

● 伊勢国分寺跡